

軽度認知症高齢者に対する信頼関係の構築 ～挨拶を通じて名乗ることの重要性～

16CC10 高木美由

I. はじめに

私は今回介護老人福祉施設に1ヶ月間実習を行った。今回実習を行った施設は複合施設ということもあり高齢者・障害者・子どものサービスを一体的に提供できる特徴がある。私が受け持たせていただいたA様は子どもが好きで、同じ敷地内にある子ども園に行きたいという希望があった為、今回の介護過程では利用者のニーズに即した下肢筋力の維持向上を目標にした取り組みを行った。

足踏みを実施していくなかで、信頼関係を築くことは利用者にとって安定した生活を送る上で重要だと感じられる経験をした。A様が職員の名前は覚えていないのに私の名前だけ覚えていたり、私を見つけると手を振ったり、私が職員と話しているときに、隣にいたA様の方から手を握ったりということなど、信頼関係が構築されたのではないかと感じられる場面が多く見られた為、今回は信頼関係の構築という視点から生活支援について振り返ってきたい。

II. 実習先種別・実習期間

介護老人福祉施設

2017年6月26日～7月28日（うち23日間）

III. 事例紹介

A様 70歳代 女性

1. 家族構成及び生活歴

A県で生まれ6歳のときに空襲等を避けるためB市に疎開する。

その後洋品屋で仕立て等を行いながら生活していたが24歳頃C市で保養所にて働く。

40歳頃母親の介護を行うため、現在のD市に引っ越した。

2. 入所に到った理由

ワーファリンを服用していることから転倒すると、毎回救急車を呼び、そのたびに近所の方に迷惑をかけていたためご家族が入居を考え入居申請に至る。

3. 健康状態

大動脈弁機能不全があり障害程度等級は一級一種である

右大腿骨骨折の既往がありボルト固定をしている

精神・知的に障害は特に無いが認知力の低下がある

4. 日常生活の状況

(1) 食事

食事形態は常食でスプーン・箸を使用する

好き嫌いが多く少食で塩分制限7gが有る

ビールが好きでよく飲んでいたら骨折してから飲まなくなりコーヒーを飲むようになった

(2) 排泄

尿意便意ともに有りトイレで排泄をする（職員は見守り）

紙パンツ・パットを使用

夜間はポータブルトイレを使用するが夜中にトイレで起きることは少ない

(3) 入浴

月・木の週2で一般浴で入浴する
頭と背中が職員が洗い、転倒注意のため見守りのもと入浴する
ぬるま湯が好きで長時間の入浴はしない

(4) 身じたく

右大腿骨をボルト固定しているため、右の靴下・靴・ズボンは一部介助で上肢は自力で着脱をする
声かけしながら一緒に着替えの準備をすることが可能
着衣失行は見られない
右の爪が巻き爪で痛いということもあり靴下を脱いでいるところがしばしば見られる

(5) 家事

食べ終わった後の食器を自力で下げようとしているがテーブルの上に置くこと職員が行う
洗濯・食事の準備は行っていない
本人は「家事はしたくないがやらないといけない」と言う

(6) 移動

日中車椅子で過ごし下肢はフットサポートに置き上肢のみで自走しコントロールは良好である
しかし車椅子が思うように動かないことや、本人は「自分は歩ける」と思っているのではしばしば立ち上がりが見られる
座位の保持は可能だが長時間の立位は不可能である

(7) コミュニケーション

聴力は問題が無く意思を他人に伝達できる
しかし面倒くさいので周りの利用者とは話したくないと言っている

5. 性格

面倒くさがり屋な性格をしているので、タオルたたみや施設内のレクリエーションはやりたくないと言う
またおおらかでのんびり屋なところがあるので人に指図されるので好まない

6.1 日の過ごし方

1日コーヒーを5回ほど飲む
出張販売の放送が入ると職員の付き添いのもと買い物へ行ったり、自動販売機で飲み物を買う
子ども園の送迎の時間になるとベランダの近くまで行き送迎の様子を見ている

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

転倒したことにより右大腿骨を骨折してしまいボルト固定をしているため右大腿骨の過度の動きには注意が必要である。本人は認知力、危険認知力の低下が見られるためか「ブレーキしなくても大丈夫」という言葉があり、自分は車椅子を使わなくても歩ける、歩きたいという希望がある。日中は立ち上がりのセンサー付の車椅子で過ごし介助時には見守り程度でADLはほぼ自立している。車椅子の操作については下肢をフットサポートに置き上肢のみで操作をしコントロールは良好である。しかし本人は面倒くさがりやという性格もあり車椅子について「思うように動かないから嫌だ」という思いもある。また子供が好きでこども園が建てられている準備の段階からこども園がよく見える窓から子どもの送迎の様子を楽しそうに見ていた。

2.介護上の課題

課題として、上肢のみで車椅子を操作しているのでこのままだと下肢筋力が低下していく点や、また認知力の低下や「ブレーキしなくても大丈夫」という言葉があるので立ち上がり時の転倒リスクが高く再度、転倒して骨折してしまう可能性があると考えられる点がある。そのため下肢筋力を維持向上して転倒して再度骨折することを防ぐ必要がある。

3.介護目標

長期目標：「歩いてこども園に行くことが出来る」

短期目標：「自発的に足を動かすことが出来る」

V. 実施及び結果

足踏みを 40 回行うという計画の実践の前に作業療法士に本人の下肢の状態、足踏みの回数の確認を行った。作業療法士は「ボルト固定をしているので右足は奥まで曲げちゃいけない、また本人の痛みを確認する必要がある」と言ったのでこの 2 つに注意しながら計画を実践した。

7月10日 (16:00~16:03)

本人に体調の確認をすると「大丈夫」と答え目標を説明し同意を得られたので実施した。

本人はテレビを見ながら行い実施中 31 回のところで止まったが再度声をかけると 40 回まで実施出来た。

本人に下肢の痛み・疲れを確認したが痛み・疲れは無し。

→31 回のところで足踏みが止まったことから意識が別に向いた可能性や気が散った可能性などが考えられる。計画を続行する。

7月12日 (15:30~15:33)

同意を得られたので実施した。

実践後両足を 10 秒程浮かせていてフットサポートを上げその後立ち上がりをされた。

痛み・疲れは無し。

→テレビを見ることなく支援者の顔を見ながら 40 回行っていたので集中して行っていたと考えられる。また足を浮かせていて本人は疲れていないと答えたので計画を続行する。

7月13日 (15:30~15:33)

同意を得られたので実施した。

実践後も自発的に足踏み、手の上げ下げ、足を動かしていた。

痛み・疲れは無し。

→テレビを見ることなく支援者の顔を見ながら 40 回行っていたので集中して行っていたと考えられる。実践後に自発的に足踏みなどの運動を行っていたので身体を動かすきっかけをつくることが出来た。計画を続行する。

7月14日 (15:55~15:58)

同意を得られたので実施した。

実践開始時に自らブレーキをかけていた。実践後は両足を上げて上下に動かしていた。

痛み・疲れは無し。

→テレビを見ることなく支援者の顔を見ながら 40 回行っていたので集中して行っていたと考えられる。実践前に本人自らブレーキをかけていたので今から足踏みをする事を認識できたと考えられる。計画を続行する。

7月15日 (15:45~15:48)

同意を得られたので実施した。

実践中視線がテレビのほうを向いていた。実践後「もう 40 回？もっと出来るよ。」と言った。またしばらくフツ

トサポートから足を下ろしていた。

痛み・疲れは無し。

→実践後「もう 40 回？もっと出来るよ」と言い下肢の痛み、疲れも無いと答えたのでさらに回数を増やすことが出来ると考えられる。

計画の実践時は 15 時半以降に 3 分程行い計 5 回行った。開始前後で本人に下肢の痛み、疲れは無かった。5 回中 2 回は視線がテレビの方を向いていたが支援者の顔を見ながら実施した 3 回の実践後は両足を上下に動かす様子が見られ、運動に対する意欲の向上や下肢を動かすきっかけとなったのではないかと考えられる。

しかしフットサポートがないことで本人の自由度が増し、また危険認知力が低いことより立ち上がりをする可能性が大きいため立ち上がりがあった際には落ち着いた声かけを行い、ゆっくりと車椅子に座っていただく支援が必要である。

VI. 考察

足踏みの実践前には必ず説明を行い同意を得てから実践した。実践前後で本人に下肢の痛み、疲れを確認したところ、それらは無いとのことだった。また 5 回中 3 回は笑顔で私の顔を見ながら足踏みをしていた。その 3 回の実践後は自発的に足踏み、下肢を上下に動かしていたので、私が行った足踏みが楽しく徐々に信頼関係も出来、運動に対する意欲の向上が見られたのではないかと考えられた。

また面倒くさがりやという性格ではあるが、4 回目の実践前に足踏みを行うことの説明をすると楽しそうな表情で「ちょっと待っててね、テレビ見終わったらやるね。」と言い、約束の時間前に、A 様の方から「いいよ、やろうか。」という積極的な声があがった。おそらくそれはその前日にも足踏みの計画を行っていたので、覚えていたことや、また、毎日のように会い少しなじみの関係となった私からの働きかけだったからなのではないかと振り返った。

深山 (2013) は「関わる人が根気よく向き合うことにより利用者の気持ちがほぐれ、変化が期待できます。一人の人間として向き合ってくれる人がいるという気持ちが、心を和ませ、心を開かせます。¹⁾」と述べているように利用者一人ひとりの気持ちに向き合うことが大切である。介護者の姿勢は利用者にも伝わり姿勢一つで安心して職員に心を開くことが出来、そのためニーズに即した介護過程を展開できるということを改めて学ぶことが出来た。また帰宅願望のような不安な気持ちになる認知症高齢者なら尚更気持ちを受容する姿勢が大切である。

私は今回の実習中、A 様に自分の名前を名乗り挨拶していたが、挨拶が出来なかったときでも、「高木さん」と私の名前を覚えていたことがあった。聞くと「他の人の名前は知らない、他の職員は私たちの名前を呼んでくるのに自分達は名乗らないもん、そんなの覚えられる訳ないじゃん。」と話していた。このように短期記憶障害のためだけでなく私たちの働きかけ、環境が適さないことも軽度認知症の方が物事・名前を覚えられないことに大きく影響を与えていると思った。利用者の立場にたって考えてみると利用者は職員のことを誰だか分からない、そんな人に介助されても嫌だな、不安だな、という気持ちがあると思われる。利用者顔と顔を合わせる時名乗って挨拶することは支援の基本であると学ぶことが出来た。

VII. おわりに

実習最後のスーパービジョンの時、指導者様から「実習生が来ていた 1 ヶ月間は A 様も落ち着いて表情も穏やかでした」という言葉をいただいた。おそらくそれは名前を名乗り一人の人間として関わったことや、介護過程を通して多くの時間をともにして信頼関係が深くなったことが影響したと今回の振り返りを通して考察することが出来た。また名乗ることはコミュニケーション技法云々の前に人として一番大切だと思った。

軽度認知症の方は名前・時間など不確かになり安心できない状況に陥りやすいので少しでも安心してもらえるように信頼関係を築いて自分の気持ちを話せるような環境を作る必要がある。だからこそ、支援を行う者として利用者一人ひとりとの時間を大切にしたい。

参考・引用文献

- 1) 深山巖 (2013) 「ケアされる側に立った介護システムとは～介護を受ける人の心やからだを知る～」
郁朋社 p65